【68】

氏　名（本籍）	田村貴紀（茨城県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博甲第4208号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本のインターネットにおける自己物語的コミュニケーションと意味空間

主　査	筑波大学教授		仲田　誠
副　査	筑波大学講師	博士（教育学）	海後宗男
副　査	筑波大学講師	Ph. D.（言語学）	高木智世
副　査	筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授	博士（社会工学）	石井健一

論文の内容の要旨

本論文は，インターネットを代表とするCMC（Computer Mediated Communication）において観察される自己表出（体験談のかたちで自己を語ること）とそれによるコミュニケーションのありかたについて論じるものである。本論文では，インターネット上での自己表出が全体的傾向として，プラマーや浅野智彦などが言う「物語的特質」をもつ点に注目し，こうした自己表出を「自己物語」と名付ける。「自己物語」はインターネット上で多くの場合，匿名的な書き手によって記述され，匿名的な読者によってコメントが加えられ，それを受けて，「自己物語」の内容がさらに書き改められるという循環的なコミュニケーション過程，あるいは相互作用的なプロセスのもとで形成されていくが，本論文では，そうした過程あるいはそれによって生じる状況を「自己物語」を通じての「体験談交換」と名付ける。本論文の中心的なテーマは，このようにして書かれる「自己物語」の特徴と，それによる「体験談交換」がもつ意味を理論的かつ実証的に明らかにしていくことである。さらに，こうした「自己物語」，「体験談交換」が可能になる場，「意味空間」としてのインターネットの特性にも注目していく。

本論文において分析の枠組を提供する軸として利用され，また同時に本論文の主題に照らしつつ，その内容自体に吟味が加えられるものが，「物語論的アプローチ」，「ミメーシス論」，「ライフヒストリーの社会学」，「電子ネットワーク論」である。「物語論的アプローチ」と「ミメーシス論」はなぜ人々が「自己物語」を行なうのかについての分析枠組を与え，「ライフヒストリーの社会学」は人々の「自己物語」が文化・社会全体にとってどのような意味をもつのかという点について巨視的かつ微視的に捉える視点を与える。さらに，「電子ネットワーク論」は，「自己物語」がなぜインターネット上で行なわれるのかという点について分析の枠組を与える。

本論文は理論的分析と実証的分析の統合にも大きな特徴があるが，本論文の実証的な研究は，アンケート調査の分析と内容分析の部分で構成される。アンケート調査の分析の対象となるのは，4年間に及ぶ質問紙調査の調査データであり，本論文では，因子分析，カテゴリカル主成分分析などの統計的手法を駆使して，「自己物語」，さらに「体験談交換」がネット上で可能になる具体的な条件を明らかにしていこうとする。さらに，内容分析に関しては，1994年～2006年の12年間に収集された8例の電子ネットワーク上の記録を対象と

した分析が行なわれ，「自己物語」，さらに「体験談交換」の具体的内容や過程の特徴が抽出される。

こうした複合的な分析視点，さらに，理論と実証の統合により，本論文では，最終的に以下のような知見を明らかにしていく。1)「自己物語」，さらに「体験談交換」がネット上で可能になる条件の解明。つまり，「匿名性への指向性」，「プライバシー意識のありかた」，「属性（性別，年齢，学歴等）」，「コンピュータ・リテラシー」，「公と私意識のありかた」，「個人主義指向・間人主義指向（間人主義とは濱口惠俊による用語，他者との協調的な関係を価値観の中心に据える態度のこと）」などと「自己物語」，「体験談交換」への指向性との関連性の解明。（具体的には，自己物語を媒介としての体験談交換への指向性には，「相互独立因子〈個人主義的・自己確認的意識〉」と「相互協調因子〈他者との協調関係を何よりも重視する意識〉」という2種類の意識・因子が複雑にからみあっていることなどがここでは明らかにされている。）2)「自己物語」を語り，「体験談交換」を行なう意識と深くかかわると思われる「日本的私意識」の構造の解明。（本論文での分析の結果，「自己物語」を語り，「体験談交換」を行なう意識は，「公」でも「私」でもない，微妙な位置にある自己意識のありかたと関連することが明らかになっている。「ブログを書いたり，インターネット上で日記を公開したりする行為の背景には，『公』でも『私』でもない微妙な意識の場，人間交流の場を求める気持ちがある」という意見への共感が，インターネット上で「自己物語」を書いたり読んだりすることへの関心と深く連動しているのである。1）の知見とからめて考えると，日本におけるインターネット上のコミュニケーションは，「パブリック」と「プライベート」，「公」と「私」という2種類の「軸」の交差する微妙な場所の中に位置づけられているとも言える。）3)「親密圏」的なコミュニケーション・相互作用への指向性を強くもつ「体験談交換」の特色の抽出。（この論文の分析によって得られた重要な知見の一つは，インターネット上での「自己物語」とそれに基づくコミュニケーションが，親密圏的なものと公共圏的なものの中間に位置するということだが，このことによって，「自己物語」の二面性が明らかになる。「自己物語」は，個人に自己表現の機会を与えると同時に，個人の意識を拘束することにもなる。本論文で分析の対象となった南条あやの「自己否定的＝自己確認的物語」は，南条に「自己を語ること」の権利を与えるとともに，彼女の物語を拘束し，やがて南条の意思自体をも拘束する。）4）電子ネットワークの特徴と深く関わると思われる「自己物語」の語られ方の類型化の発見。（ここでは，質的な分析に加えて，KH-Coder を使用したターミノロジー〈基本的なタームの出現のしかた〉の構造の分析が行なわれるが，それによって，「自己物語」がパターン化し，類型化する構造を持つことが明らかにされる。たとえば，インターネット上では，「死産」を経験した女性たちが集まり，体験談を交換するコミュニティが複数存在するが，興味深いことに，こうしたコミュニティにおいては，使用されるターミノロジーが，基本的な部分で類似した性質のものとなっている。たとえば，「天使の梯子」というコミュニティと「WAIS」というコミュニティはともに，「死産」を「誕生死」と語りなおし，「オルタナティブ」な物語を再構築していくことを目的として人々が交流するコミュニティだが，そこにおいて使用されるターミノロジーは，おどろくほど類似している。「私」，「思う」，「気持ち」，「言う」，「自分」というターミノロジーは出現頻度という点で，ターミノロジー全体の中で上位を占めるが，こうしたターミノロジーの出現順位も出現比率も二つのコミュニティにおいてほとんど同じである。）

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の特徴，独創性は，インターネットで語られ形成される「自己物語」の実態，それを媒介として成立するコミュニケーション，「体験談交換」の内容の実態，そうした実態の背後にあるもの，さらに，そうした実態への評価を，理論的分析，現象の観察，人々の意識のありかたに関する質的・量的調査によって，全体的に明らかにしようとすることにある。「自己物語」や「体験談交換」はこれまでにメディア研究者，社会学者，心理学者たちによって注目されてはきたが，実証的なデータとして得られたものは豊富とは言え

なかった。しかし，本調査では，質的・量的データの分析の結果，「自己物語」や「体験談交換」への指向性に影響を与える心理・社会的要因，メディア評価，属性の差異などの実態が詳細に明らかにされ，また，「自己物語」や「体験談交換」が「親密圏的な人間関係の指向性」，「共生指向」，つまり，「他者とともに生きる社会への指向性」と連動している点などが詳細かつ全体的に明らかにされている。さらに，「体験談交換」の実態，現実の姿が全体的に明らかにされることによって，それが日本的な「人間関係重視」の文化的・社会的特性と多くの点で重なりあうことなども明らかになっている。こうしたさまざま知見を明らかにし，同時に「自己物語」や「体験談交換」を解明していく分析的枠組みを独自に模索しようとしたところに本論文の大きな特徴があり，本論文の価値を高めるものになっている。

本論文は以上のような点で高く評価されるものであるが，ただ，いうまでもなく本論文の分析ですべての問題点が明らかになったわけではなく，いくつかの問題がかならずしも十分に解明されないまま残されたことは残念な点ではある。

こうした問題点をここで列挙すると以下のように整理できる。

1) 電子ネットワークの特徴と深く連動すると思われる「自己物語」的パターンの類型化，ブリコラージュ化（既に存在するパターンの継ぎはぎ化，使い回し）は，「自己物語」が「ドミナント（主要かつ類型的）」なストーリーに（再）統合されていく過程を究明する上で大きなてがかりとなる可能性のある視点だけにさらに深い分析が欲しかった点である。2) 本論文では，電子ネットワーク上で自己を語ることは，基本的に親密性と公共性の間に位置する性質をもつものであるとされているが，本論文のある部分では，電子ネットワーク上で自己を語ることは，他者との交流と自己主張的表現（用語は違っているが）を同時になしとげることであるとも言われている。こうした自己意識の多面性を最終的に「親密圏・公共圏」という図式の中に位置づけてしまうことは，「自己物語」の分析を従来のありきたりの枠の中に留めてしまうことになるのではないか。本論文の分析に使用されたデータの中では，電子ネットワーク上のコミュニケーションと，「運命論」や「物欲否定」，「（日本的）自然観」などの「世間的価値」との結びつきも明らかになっているが，こうした点を考えると，「親密圏・公共圏」図式だけでは「自己物語」を十分に把握できないことは明らかである。「自己意識」が実存にかかわる意味の領域の中にも深く根差しているということは，「エピファニー体験」（自己意識の転換点となるような決定的に重大で深刻な体験）が「自己物語」の中核に位置するということからも明らかであろう。3) 本論文では，物語とは，個人の人生についての重要な体験（たとえば，エピファニー体験）と社会とが交錯する接点を見いだせるようなテキストだと言うが，論文中では個人と社会の接点の限られた部分しか記述されてないのではないか。4) 本論文では，「物語」とは，一定の視角から行為や体験を取捨選択し，かつそれらを一定の筋に沿って配列していくことによって初めて，生み出されるものであり，その取捨選択と時間的配列を指して「物語」と呼ぶ（この物語論の規定は浅野智彦の議論に基づく）のだとされている。この物語に関する規定は興味深いが，しかし，「物語」の組立を規定する「一定の視角」とは具体的にどのようなものなのか。「物語」であることによって，「自己意識」やコミュニケーションのありようがどのように方向づけられていくのか，その点に関して，「多様な物語論」の議論を踏まえて十分な議論がなされているか。

しかし，同時に，こうした問題点も，それ自体が，本論文の独自の分析の手法，つまり，「物語アプローチ」，「ミメーシス論」，「電子ネットワークの特性」，「親密圏と公共圏（公私）」の4点（4つの鍵概念）をクロスさせるという斬新的な試みの中で明らかになった点でもあり，これが本論文の決定的な欠点であるとも言えない。むしろ，こうした点を浮き彫りにしたことが本論文の功績であるとも言えるのである。本論文における分析それ自体が本論文の中で「ミメーシス」と位置づけられているが，この「ミメーシス」的な記述によって，本論文の考察はさらなる問題提起への道を切り開いていったとも言えよう。本論文の重要な知見の一つである，「自己物語」の類型化」の問題，具体的には，「異なった掲示板での類似のターミノロジー（使用さ

れる語彙, 言い回し）の出現パターン」に関する発見なども,「ミメーシス論」を含めた本論文の射程の深さ・広さによってはじめて明らかにされた点である。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。